

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	18
瑪瑙集	29
紅玉集	30
4月号月評	32
恵贈句集拝見(85)	34
恵贈俳誌拝見(50)	36
特別作品「彦根竹生島紀行」	38
特別作品「エーゲ海クルーズとギリシャ旅行記」	40
琥珀集作品鑑賞	44
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	45
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	46
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	47
別冊100号会員自選句鑑賞(6)	50
他誌転載	52
俳誌交歓	54
琵琶湖俳句サロン	55
ひこばえ会通信「年間活動予定」	56
イザナミの言語学(16)	58
宇治茶香服吟行記	60
エッセイ「みささぎ」	62
関係者各位	63

★俳誌「瓊」は一〇九号（四月号）を以て終刊いたします★

平成二十年四月に「瓊」を創刊致しまして、七年になります。会員の皆様と他結社の先生方の温かいご支援により恙なく過ごすことが出来た、幸せな七年間でした。厚くお礼を申し上げます。

今年の「瓊別冊創刊一〇〇号記念特集」を機に、更に新しい俳誌を目指して、幹部役員の方々と幾度も会合を開いてまいりました。役割の世代交代についての提案を致し、また自らの体力に限界を感じて、代表辞任を申し出ました。合議を重ねた結果次のような運びとなりましたので、ご報告申し上げます。

「瓊」は一〇九号を以て終刊とし、塩路隆子は九月を以て「瓊」を引退、以後は、編集・構成・企画等々新役員合議の上での運営となります。詳細は、一〇九号（四月号）に掲載しております。

会員の皆様には、倍旧のお力添えをいただきます様、ご協力をお願い申し上げます。

平成二十七年三月

瓊代表 塩路 隆子

宇治逍遙

塩路隆子

冬天に蘇りたる鳳と凰

檜皮葺く簷ゆるやかや冬木の芽

(宇治上神社二句)

覆屋の蔵せる三社凍格子

梵鐘の潰えし撞座寒土用

自刃碑を濡らす小雨や龍の玉

冬霧に深まる孤愁式部像

源氏車といふ名を負うて寒椿

四月号光耀抄

風は研ぎ日は慈しみ干菜汁
 御僧の鞆の手の遠慮がち
 山裾の風重ねつつ春を待つ
 裏庭は風棲むところ寒あやめ
 蓬餅涙の訳を言はぬ子と
 首塚はあの辺りなり草萌ゆる
 六甲の地下水温し灘五郷
 掌に手の色と看る冬桜
 水仙の揺るる海沿ひ予讃線
 合点のいかぬ話や芹を食み
 冬の波湖のま中の魼傾ぐ
 位置に着く猫の駅長初仕事
 日差し追ひ躡る縁側日向ぼこ
 比良山と寒咲花菜見頃なり
 大寒の五臓六腑へ鶉粥
 砂時計待つひとときや日脚伸び
 衣ほつれ鞆の港の古雛
 大淀の波のきららや草萌えて
 陽炎のかなたに揺るるフラミンゴ

塩路 隆子選

松岡 和子
 宮崎 左智子
 伊東 和子
 伊藤 純子
 鈴木 照子
 笠井 清佑
 山口 キミコ
 宮田 香
 井口 淳子
 森下 康子
 坂根 宏子
 阪本 哲弘
 北尾 章郎
 竹内 悦子
 粟倉 昌子
 石川 かおり
 西郷 慶子
 坂上 香菜
 塩路 五郎

屈託なき成人式や珠の笑み
 容赦なき風に失速春の蝶
 春立つや庭に幡干す染物屋
 動き出す気配も見えず冬の雲
 初場所の呼出し次郎すくと立ち
 裸木の影絵となれり夕日射
 ふる里の風に抱かれ寒椿
 水尾引きて白蛇の塚へ番鴨
 しだれ梅影そのままにふふみけり
 露味噌や厨に夫の爛支度
 今朝雪の浄土となれる陶の里
 熱爛や京の和風のおもてなし
 奈良墨の干場匂へり春隣
 聴きとれぬままの相槌夕朧
 晴るる日の波穏やかや雪見舟
 白一色合掌村の寒日和
 食通に京のブランド冬野菜
 凍つくすアイアムケンジ無力感
 寄鍋は夫の差配にまかせける
 寒雀三尺寄るも飛び発たず

川崎 利子
 国包 澄子
 小西 和子
 大島 みよし
 佐用 圭子
 田中 浅子
 辻 香秀
 辻 知代子
 中川 すみ子
 中村 ふく子
 橋本 靖子
 秦 和子
 藤見 佳楠子
 福本 すみ子
 増田 一代
 松田 和子
 三川 美代子
 山崎 里美
 渡部 法子
 山本 孝夫

白菜のずしり坐りて主の座
 曇る日も花穂艶やか猫柳
 鰯酒の喉元過ぐる旨さかな
 控へ目がうら寂しきや実千両
 キッチンは私の書斎ヒヤシンス
 枇杷の花に近道をして出会ひけり
 平凡な日々こそ宝蜜柑剥く
 呑み干して五臓の震へ寒の水
 里山に日本の未来建国日
 露の臺夜雨に濡るる顔見せて
 一卷をなほ読み終へずはだれ雪
 白障子不意に襲へる鳥の影
 野宮のくぬぎの鳥居寒雀
 冬晴や白木清らに伊勢の宮
 瘦せ鮠の骸を埋め白き夜
 一尺の雪踏みならす軋み音
 壇上の子らのほっぺの梅あかり
 廃棄せる百科事典や春寒き
 撫で牛に梅の二分咲天神社
 子を送る傘に重たしなごり雪

吉田 宏之
 飯田 美千子
 伊藤 憲子
 大松 一枝
 杉本 綾
 伊庭 玲子
 能勢 栄子
 山田 愛子
 鷺見 たい子
 西田 史郎
 安西 信隆
 片岡 久美子
 桂 敦子
 木戸 宏子
 谷口 俊郎
 高谷 栄一
 土井 久美子
 藤本 秀機
 横田 矩子
 松田 洋子

山里の地を這ふ雲や沈丁花
 白障子嬰を抱く母の影ゆたか
 つひ釣られ春日に古書を大人買ひ
 上々の灘の新酒の初しぼり
 山眠るふもとの村の灯を抱きて
 名刹の延寿の箸や小豆粥
 一峰にかかる夕日や寒雀
 縁側にゆると坐りて猫火鉢
 佐保姫へいま早駕籠を差し向けむ
 小格子に節分鰯刺す旧家
 佗助や山門不幸の椿寺
 春光に映ゆるさざ波未来影
 感情の昂ぶる心地春立ちぬ
 湯豆腐にまたも浮かびぬ夫の顔
 梅の道来て管長の話聞く
 すべて手を伸ばせば足りる春炬燵
 ヨーグルト固まりきらぬ余寒かな
 藩校に響く朗唱春浅き
 ふたり用の土鍋新調春浅し
 喜寿祝ふ餅の紅白春立ちぬ

森田 利和
 中井 登喜子
 中井 弘一
 西垣 順子
 西村 敏子
 十時 和子
 笹井 康夫
 柴田 敬子
 小林 久子
 伊藤 和子
 稲田 和子
 岩梶 隆子
 大谷 信子
 宮越 久子
 宮濱 安子
 鶴田 武子
 倉谷 紀子
 脇 美智子
 脇 康彦

琥珀集

輝

宮崎左智子

成人式時代の波の容赦なく

御僧の鞭の手の遠慮がち

寒雀そなた連合解きたるか

御閻魔の真向ひにゐて冬ぬくし

慣れぬ齡とまどふ日々に四温なき

佐保姫のおいで待ちゐる不精猫

豆まきの後始末するルンバかな
(自動掃除機)

干菜汁

松岡 和子

陽光に梅一輪の素直かな

温泉といふ極楽や冬銀河

陵王の舞のひとさし冬簾

風は研ぎ日は慈しみ干菜汁

荒波のそこまで来たり野水仙

沢庵に水上がり来る気配かな

一舟もなき日本海鯽起し

立春

伊東和子

山裾の風重ねつつ春を待つ

水餅のしづかや日日の刻流れ

立春や小窓の開く鳩時計

手袋の指先空を掴みけり

冬の鳶明智びいきは在所ゆゑ

うどん屋に列や四温の京町家

悴める指ほぐしけり始発駅

春 隣

鳳凰の飛び立つ構へ春近し
待春の船乗観音漕ぐさまに
妻は風邪夫厨房に入るはめに
阿字池の鯉動き初め春隣
裏庭は風棲むところ寒あやめ
立春の日射浴びよと呼ぶ鴉
鬼の面つけて下校子追儼の日

伊藤 純子

春 隣

父の呉るる頑張り時の寒卵
根気よく待つこと得たる寒鴉
山焼の煙を背にし帰路の人
火渡りの墨染の兒や余寒なほ
首塚はあの辺りなり草萌ゆる
発掘の西方遺跡春の泥
春隣光の瀧のなばな里

笠井清佑

蓬 餅

鈴木 照子

灘五郷

山口キミコ

南高梅海の荒風好みをり
先駆けの紅梅一枝海を差す
炭四方に張れる牟婁の湯梅日ざし
萩焼の盃艶やかや春の宵
両替商と掲げ余寒の里格子
節分の袋小路に鬼気配
蓬餅涙の訳を言はぬ子と

（彦根城下）

灘の酒試飲に酔うて春講座
六甲の地下水温し灘五郷
灘酒を造りたる蔵梅一輪
草萌ゆる菟原処女の芦屋塚
水温む生田川辺の処女塚
居心地のよきかな我が家風邪の神
席題はこの日の季語や菜の花忌

（飛鳥寺西方遺跡）

冬桜

宮田 香

掌に手の色となる冬桜
霰降る破風に鳳凰シルエツト
冬鳥の声の高さや鎮守杜
蛇行する姿顕はに雪解川
春生るるあたりを嗅げる猫と住む
堤焼く炎の形風まかせ
春泥の礫蹴り上げ馬駆くる

春立つ日

井口 淳子

宇和沖の豪華客船冬かもめ
水仙の揺るる海沿ひ予讃線
寒晴の蒼きを回す風車群
鉄道唱歌発祥の地や春憐
冬霧らふ向ひは豊後風岬
とれとれの鯛をひっ提げ寒の旅
南画展に入選の報春立つ日
(南画院展)

プラス^{ワシ}1

森下 康子

忙しなく過ぎゆくひと日春遅々と
献立に春の香をプラス^{ワシ}1
湯煙の街に湯気立て饅頭屋
病棟の消灯コール寒戻る
悩み多き齡となる児春隣
合点のいかぬ話や芹を食み
席取りは生涯苦手着ぶくれて

冬の湖―雪見舟―

坂根 宏子

ゆりかもめ一群となり舟送る
雪山を背に浮御堂波荒し
冬の波湖のま中の魴傾ぐ
雪の湖鳥居の奥の鳥居かな
(白嶺神社)
大小の波を躲して鴨飛翔
雪しまき不意に竹生島^{ちくぶ}の現はるる
苔むせる古木の力梅早し
(長浜盆梅)

猫の駅長

阪本 哲弘

天地の氣息窺ひ去年今年
位置に着く猫の駅長初仕事
薙刀の裂帛届く初稽古
目鼻立ちピカソを凌ぐ福笑
干戈なき世を念じたり初詣
三日子は大国主の荷を担ぎ
雨戸繰り白銀眩し初景色

(二年目の誕生日)

軒氷柱

北尾章郎

炉火盛んこれも馳走の一つかな
長廊の老舗綺羅なす軒氷柱
日差し追ひ踊る縁側日向ぼこ
お点前の炭火撥ねたり退く速さ
見舞かす大和三山初景色
初雀湧くごと都心大通り
公園の桜芽吹きを見上げたり

雛飾り

竹内 悦子

雛飾る嬰は貧欲に食べて寝て
桃の花枝剪ることを躊躇うて
うぐひす餅本日に召されませ
鴨川の光増しけり春めきて
伊勢詣先づ顔映す五十鈴川
不覚にも足に霜焼塗ぐすり
比良山と寒咲花菜見頃なり

福豆

栗倉 昌子

曼荼羅絵^{まみ}見ゆる堂の闇凍つる
大寒の五臓六腑へ鶉粥
こだはりの珈琲点つる寒九水
夫と吾器異なる蕪蒸
独りの夜纏るる毛糸解きけり
力士より受くる福豆病む人へ
立春や背筋伸ばして撮しける

瑠璃集

寒 雀

能勢 栄子

寒雀一群れとなり飛び発てる
平凡な日々こそ宝密柑剥く
看護師に名を呼ばれけりコート脱ぐ
冬帽子ひと日一キロ歩くなり
温かきココアに心癒さるる

ヒヤシンス

杉本 綾

母よりも長く生きゐて寒の紅
蜂蜜の白濁の朝冬の鵒
比良の雪のまぶしさ吾をはなれざる
キッチン私の書斎ヒヤシンス
三寒四温恙なき日をいつくしむ

雪積む朝

伊庭 玲子

枇杷の花に近道をして出会ひけり
土産にと庭の臘梅一枝剪る
目覚むれば雪積む木々に音も無し
鬼の面節分までは飾りもし
春寒し数かぞへつつ湯に浸る

砂のアート

鷺見たえ子

森は海を永遠に恋ひをり冬日和
フォーラムの砂のアートや冬うらら
里山に日本の未来建国日
きびしすぎ最強寒波到来す
粉雪舞ふさなか舞妓のすまし顔

山田 愛子

紅玉集

きむらかなで（二才）
真くんとかなでちゃん生まれでよかったね
こんなにもかわいい真くんうまれたね

節分

松久 奈桜（小四）

鬼は外悪い心をやつつける
豆投げて良い事あるかな福は内
恵方巻きしゃべるのがまんほおぼった
恵方巻き早く食べ終へしゃべりたい

廣瀬将也（小六）

老梅が学校帰りをお出迎え
涅槃会の花供祖団子待ちどおし
初試合野球の楽しさ実感し
かす汁に背中を押され打席入り
かるた会あと一枚でばくの勝ち

さくらさく長い努力が実を結ぶ
青い空輝く未来さくらさく
梅の花ばつとほころぶあたたかさ
鳥うたう色とりどりの春景色
春風や鳥のさえずりに包まれる

森田泉美（小六）

妹とおでんの種を取り合へる
お喋りな友達の声雪となる
犬抱きて手に伝わった暖かさ
土井穂乃佳（小六）

塩路 彩奈（中二）

アーモンド入りのクッキー春の蝶
楽しみな羽球の試合春風に
辛業生送る準備の花選ぶ
塾帰りココアでほっとくつろいだ
期末テストすんだら春のピザ食べに

塩路 遼（中三）

一〇〇パーセントの実力出れば大試験
春風に一枚脱いで又一枚
イギリスのライブ楽しみ三月来る
卒業の準備手間どる試験前
桜咲き高校生活始まるぞ

四月号月評

塩路 隆子

次号からは月評のコーナーが省かれるので、これが最後の月評となります。気を入れた月評にしたいと思います。

風は研ぎ日は慈しみ干菜汁

松岡 和子

風に研がれ、風に慈しみを受けた干菜が、おみおつけの具となって、卓上にあがっている。しゃりつとした歯ごたえは風に研がれたもの、また自然のこの甘味は、太陽が存分に与えてくれた慈しみと思いながら食べる食事は、何にも勝る健康食。しかも甲賀の野で獲れた自作の野菜。身ほとりには句材がいっぱい。今後またゆまず、身ほとりの句を作り続けてほしい。

御僧の鞆の手の遠慮がち

宮崎左智子

隔月にエッセイを掲載していただいているが、おじいちゃま譲りの洒脱な句を発表される一人である。好評で「ホトトギス」の重鎮である大久保白村先生のお目にも止り、100号の表紙の俳画も含め、多才とお言葉をいただかれた一人である。喜捨を受ける御僧が、遠慮勝ちに出された手の「あかぎれ」が目についた。作者の瞬時

の観察眼の面白さを褒めたい。

山裾の風重ねつつ春を待つ

伊東 和子

平生、裏山の風がきついのですと言っておられた作者であるが、長年お住まいのあった醍醐を離れ、市内のマンションに引っ越されることになった。その名残の句でもあるろう。作者のことであるから、新しいマンション暮しもすぐに順応されることを祈りたい。「春を待つ」の季語が安堵を与えて呉れる。どうかお疲れが出ませんように、・・・。

裏庭は風棲むところ寒あやめ

伊藤 純子

作者も同じような裏庭を詠んでおられる。「風棲むところ」から矢張り北側であろう。丈は20〜30センチ葉は3ミリ位、晩秋から冬の終わりに咲くいわゆるあやめの小型のものと言っている花である。冬蕭条とした中に咲く「寒あやめ」が印象的。それを見る花好きな作者が、顔をほころばせて和む姿が浮かぶ。作者の句を見る限り、いつもほっと救われた気にさせるのが、作者の句の特徴であろう。〈以下略〉